



舞と素踊りで描く源平の合戦

桜美林大学特任教授 舞踊評論家 丸茂 祐佳



【与一の段】（前）那須与一 尾上菊之丞、（中）源義経 市川染五郎 （後）玉虫 藤間紫

祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響あり
沙羅双樹の花の色
盛者必衰の理をあらはす……

国民文学の白眉と讃えられる『平家物語』、書き出しの一節は人口に膾炙し、きわめて多くの人に愛誦されている。韻律的な表現に始まり、冒頭に流れる無常観が全編に通底する——、人はこの上もなく『平家物語』に心をゆさぶられる。思い起こせば、『平家物語』の伝記（伝承の記録）をモチーフにした能楽、文楽、歌舞伎などの古典芸能は枚挙にいとまがない。日本舞踊

もまた然り。昨年では、花柳基の源義仲役と藤間恵都子の巴役の新作『鳩の湖 義仲巴別れの段』（円美恵子作、鶴澤津賀寿作曲、堅田新十郎作調、7月22日、国立小劇場、「二人会」初演）の印象が強かった。今年の前半期は、出雲蓉の『一谷嫩軍記 須磨浦組打の段』と尾上菊之丞らの『与一の段』が優れた舞台成果を挙げた。

前者は「第五十五回 出雲蓉の会」（5月19日、国立能楽堂、田中英機演出、高木どうみょう照明、高橋嘉市音響）での再演で、六世澤村田之助三回忌追善の演目。会主の出雲蓉の舞の師匠は名手として知られた神崎ひで。師の亡

きあと、人物の情念を体得したく出雲は田之助に指導を受けてきた。その中でも思い出あるものが義太夫『須磨浦組打の段』だと言う。熊谷次郎直実が平家の若武者平敦盛の首を討ち取る場面で、出雲は鷹揚な熊谷と凛々しい敦盛の2役を演じたが、その舞い分けが興味深かった。歌舞伎舞踊や御祝儀物や上方舞の演じ分けの常套手法の1つは居所でクルリと回って性根をパッと切り替え別の人物になるが、出雲の場合は肉体が別の人物に変化しつつ役を切り替える。この独自の手法は、かつて文化庁在外研修生としてウィーン国立音楽大学でパントマイムを学



『一谷嫩軍記 須磨浦組打の段』 出雲巻 撮影:高城有香



『古道成寺』 出雲巻 撮影:高城有香

び、その後、自ら提唱してきた舞とマイムを融合させた「舞夢」の結実と言えよう。

また、出雲はライフワークの地唄『古道成寺』を今回も練り上げて上演し、僧と娘の舞い分け以上に語り部(婆)とまなごの莊司に見応えがあった。ほかに、能『敦盛』より一調一管「中ノ舞」(小鼓 曾和正博、笛 一噌庸二)と間語り(野村裕基)、能『景清』より小舞(野村万作)という豪華な番組に埋め尽くされた見所の人々は堪能した。

後者は「第五回 古典芸能を未来へ～至高の芸と継承者～」講談(5月28日、明治座、杉本公亮照明プラン、井田勝久音響プラン)での上演。このシリーズはNHKエンタープライズ・「古典芸能を未来へ」実行委員会の主催による公演で、これまでに毎回大きな話題を呼んできた「芸の真髄」公演に続くシリーズとして2018年にスタートした。今回のテーマは「講談」で、講談界の大御所神田松鯉と人気絶頂の神田伯山の師弟による伝統と継承に焦点を当てた企画。そこに伯山のアイデアで舞踊を加えた多彩な番組となり、明治座のチケットは前売り段階で

完売という盛況ぶりであった。

舞踊「与一の段」(海津勝一郎構成、半田淳子作曲、尾上墨雪振付)は那須与一の扇的脇にしてその直後の展開である平家の老武者に二の矢を放って射殺した件に主眼をおき、源義経と与一の内面を見事に素踊りで表現した意欲作。尾上菊之丞の与一役と市川染五郎の義経役と藤間紫の玉虫役は一人一役でなく、時には情景を具象的に、心情を抽象的に、と描き、尾上墨雪による洗練された素踊りの世界を満喫させた。初演は「第9回 冬夏会」(1990)で2人立ちであったのを「第21回 冬夏会」(1998)から3人立ちになった。ほかに舞踊の演目では、坂東巳之助が芝居心申し分なく『浦島』を披露し、歌舞伎舞踊の楽しさを観客に届けた。そして、この公演の自家本元の講談では、伯山が『お岩誕生』、松鯉

が『乳房榎』と2つの怪談話をたっぷり聴かせ客席を大いに湧かせた。序幕の「お楽しみ」は伯山の『阿武松』。

さて、『平家物語』をモチーフにした『須磨浦組打の段』は巻第九「敦盛最期の事」を作者の並木宗輔らの合作者が大幅に脚色した、人形浄瑠璃(文楽)と歌舞伎の名作「一谷嫩軍記」である。また、『鴉の湖』は同書巻第九「木曾の最期の事」を軸に巻第八「山門御幸の事」等の回想を入れた新作、『与一の段』は能楽や歌舞伎にみる巻第十一「那須与一の事」にその後の「弓流しの事」の発端で描かれた二の矢を重点にした新作。このように、古典ばかりではなく『平家物語』をモチーフにした新作は次々生まれている。一体、もしもこの国民的一大叙事詩がこの世になかったら、日本の古典芸能はどうなったであろうか。一度、ゆっくりと考えてみたい。



『浦島』 坂東巳之助